パルミラの有名人・ハイラン

酒　井　龍　一

は　じ　め　に

紀元1世紀の中頃、シリア砂漠中央の隊商都市パルミラPalmyra（𐪥𐪢𐪡𐪥𐪤タドモル）に、ハイラン𐪩𐪥𐪠𐪨という有名人がいた。ラブエル𐪤𐪫𐪣𐪥のニックネームをもち、父はボーナ𐪫𐪡𐪢𐪣、母はバアルテガ𐪫𐪦𐪤𐪢𐪥𐪣であった。彼は、パルミラ市やベール神殿等に大いに貢献し、市内要所の碑文で顕彰された、しかるべき人物であった。

パルミラの碑文は、パルミラ語か、ギリシャ語を加えた二カ国語併記が通例。だが、彼自身による墓建造碑文や彼の顕彰碑文は、パルミラ語・ギリシャ語・ラテン語の三ヶ国語併記である。これらの特異な碑文は、パルミラ人では彼に限定され、かねてから研究者が解読を重ねてきたきたところである（Cantineau 1933; Rodinson 1950; Rosenthal 1936; Gawlikowski 1970, 1973; Teixidor 1979; As'ad and Gawlikowski 1997)。

本稿の目的は、ハイランとその家系に関する各種の碑文（PAT2801・TADMOREA 2B・PAT1356・0259・0273・1616・2759）を詳細に再検討し、彼の系譜や周辺世界への接近を試みることにある。

都市パルミラの歴史的状況と三ヶ国語碑文

碑文の検討に先立ち、Parca（2001; p71）を代表させ、最近の見解を抜粋・紹介しておく。①は都市パルミラとギリシャ・ローマ、②はパルミラ語とギリシャ語・ラテン語、③はパルミラ碑文とラテン語・ギリシャ語・パルミラ語の関係についての評価である。

① Palmyra as an urban center was created in the first century BCE, and as it developed into a Greek city, acquiring Greek organs of government and offices in the second half of the first century CE, it also entered the sphere of the Roman province of Syria.

② Lastly, a group of trilingual inscriptions from Palmyra documents a pattern of

cultural and linguistic interaction that moves counter to those discussed thus far, in that the texts illustrate how Greek and Latin terminology and concepts found expression in a Semitic language. When Latin enterd the Near East, Greek was the primary language of communication throughout the area and, as such, came to function "as a medium of transmission between the various Semitic languages used in the region on one hand, and Latin on the other."

③ Unlike in other Greek cities in the region, its people continued to use their native Palmyrene, an Aramaic dialect, in both official and funerary inscriptions, although public texts tended to be bilingual in Greek an Palmyrene.

ハイランの墓建造碑文（PAT2801）

ハイラン自身による墓建造碑文である（第1図)。パルミラ博物館蔵。アゴラの南側4メートル、中央門の西寄りで出土した（Rodinson 1950)。既に原位置を離れ、墓もその位置も不明。板石上のカルトゥーシュ（ローマと共通する碑文枠）内に、ラテン語（1～3行)・ギリシャ語（4～8行)・パルミラ語（9～13行）の三カ国語併記がされている。

パルミラ博物館の碑文カタログ（As'ad and Gawlikowski 1997）や、ジョン・ホプキンス大学の碑文集（Hillers and Cussini 1996）では、なぜかギリシャ語文の7行目の「ΚΑΙ ΒΩΝΝΗ ΠΑΤΡΙ ΑΤΤΟΤ」部分が欠落している。単なるミスであろう。

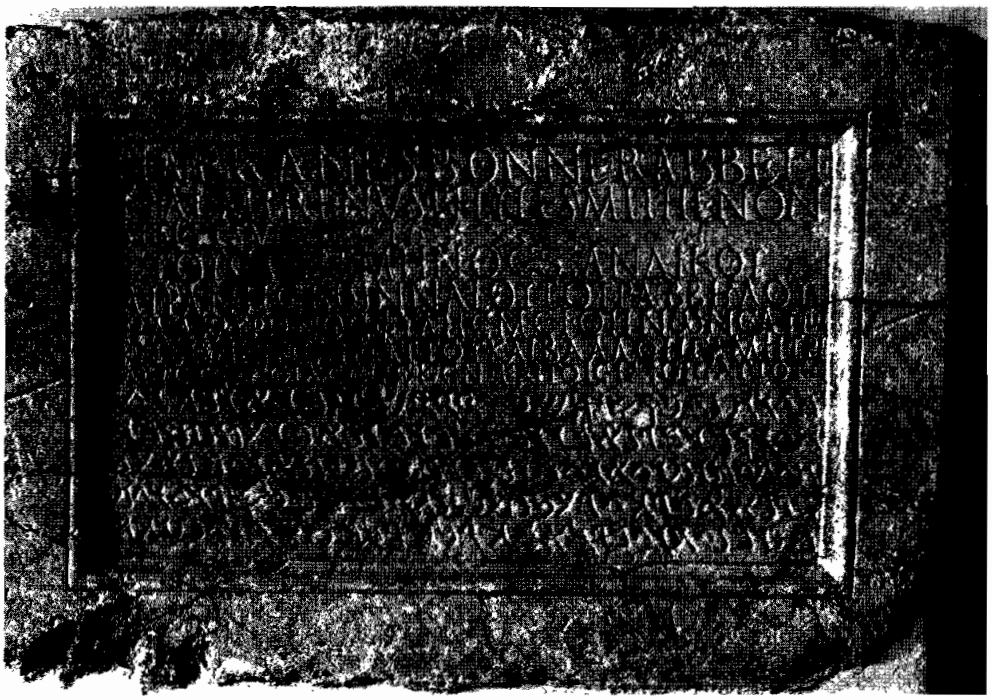
以下、各語に分け検討を進めながら、各単語に目安程度の英単語を付記する。ついては、人名・部族などは、いずれの言語にかかわらずパルミラ語風表記とする。

ラテン語文

1 HAERANES BONNE RABBELI・
Hairan Bonna of Rabb'el

2 F（ILIVS)・PALMYRENVS・PHYLES・MITHENON
son Palmyrene tribe of Mita

3 SIBI・ET・SVIS・FECIT・
for himself and his relatives built



第１図　㈶島根県並河萬里写真財団提供

三ヶ国語併記の場合、ラテン語・ギリシャ語・パルミラ語の順となる。

冒頭の「ＨＡＥＲＡＮＥＳ」は、「ハイラン𐫄𐫁𐫀𐫂」のラテン語風表記。続く「ＢＯＮＮＥ」は父「ボーナ𐫉𐫅𐫆𐫇」、「ＲＡＢＢＥＬ」は祖父「ラブエル𐫃𐫉𐫇𐫁」のラテン語風表記。「ＲＡＢＢＥＬＩ」の「－Ｉ」は属格。２行目冒頭の「Ｆ」は「ＦＩＬＩＶＳ 息子」の略。ローマのラテン語碑文は、略字は頻繁である（Keppie 2001・Bodel 1992)。「ラブエルの息子ボーナの息子ハイランが」云々と、三代の家系を示している。

以下、「パルミラ人」であること、「ミタ族」であること、この建造が「彼（ハイラン）自身と彼の親族のため」と記している。なお As'ad and Gawlikowski 1997 や Hillers and Cussini 1996 は「ＰＡＬＭＩＲＥＮＶＳ」と読んでいるが、「ＰＡＬＭＹＲＥＮＶＳ」が正しい。「ＰＡＬＭＹＲＡ パルミラ」の名称はラテン語とギリシャ語に限定される。併記文でも、パルミラ語では「𐫁𐫇𐫄𐫁𐫃タドモル」と記される。また、「ＰＨＹＬＥ 部族」はギリシャ語の「ΦΤΛΗ」からの借用語である。ローマでは、パルミラのような血縁関係による部族よりも、投票区域を意味する「ＴＲＩＢＵＳ 部族」という用語が一般的であったようである。

「建造した」を意味する動詞「ＦＥＣＩＴ（ＦＡＣＩＯ)」が、ラテン語の原則に従って文末にきている。主語は、１行目冒頭のハイランである。

ギリシャ語文

4 ETOYC・ΓΞT MHNOC ΞANΔIKOY
year 363(A.D.52) month of Ksandikos

5 AIPANHC BWNNAIOY TOY PABBHΛOY
Hairan of Bonna his of Rabb'el

6 ΠAΛMYPHNOC ΦYΛHC MEIΘHNWN EAYTW
Palmyrene tribe of Mita for himself

7 KAI BWNNH ΠATPI AYTOY KAI BAAΛΘHΓA MHTPI
and for Bonna father his and Balthega mother

8 AYTOY EYNOIAC ENEKEN・KAI TOIC IΔIOIC AYTOY
his kindness by and to them for them his

冒頭に、建造年月を「363（西暦52）年クサンデコス（4）月」と明記している。通例、パルミラでのギリシャ語碑文は、「セレウコス暦（前312年10月に始まる）」による「マケドニア暦」(Hillers and Cussini; 1996 p.443) を採用し、年月日の順で記す。数詞はアルファベット方式である。テキストでは、右側に「'」の記号を付記する。「Γ'」は「3」、「Ξ'」は「60」、「T'」は「300」である。従って、合計で「363」となる。数字は、左から一・二・三桁目の順である。西暦への換算は、碑文に記された数から、「1～9月」は「311」、「10～12月」は「312」を引き算する。本碑文は「4月」に該当するので、「363－311＝西暦52年」となる。仮に月名が記されていない場合、「西暦51年」か「西暦52年」かは不明となる。

なお、明確に年代を伴うパルミラ最古の碑文（パルミラ語文）は、今日、「269（前44年）年ティシュリ（10）月」付けである（PAT1524)。また、年代が明らかな最古の墓は、有名な「アテナタン塔墓」(PAT0457) で、「304（紀元前9）年カナン（11）月」付けである。

5行目の「AIPANHC」は「ハイラン𐫄𐫁𐫀𐫇」のギリシャ語風表記。以下、定冠詞「TOY（男性・単・属格)」を夾んで、父「ボーナ𐫉𐫂𐫃𐫅」、および祖父「ラブエル𐫆𐫉𐫅𐫁」のギリシャ語風表記（属格）である。定冠詞は「～の息子」の意味。ラテン語文と同様、三代の家系を記している。

6行目には、同じく、「パルミラ人」であること、「ミタ族」であることを記す。6行目末

～8行目に、「彼（ハイラン）の善意によって。彼自身と父ボーナと母バアルテガと彼の親族達のため」と記している。この中で、ラテン語文になかったハイランの母（𐪀𐪇𐪊𐪆𐪄𐪅バアルテガ）が新たに登場している。

なお、「この墓を」（直接目的語）や「建造した」（動詞）は省略されている。

パルミラ語文

𐪁𐪄 𐪇𐪆𐪄 𐪀𐪄𐪅𐪃 𐪈𐪈𐪈333𐪋𐪈𐪈𐪈 𐪃𐪆𐪉 𐪂𐪆𐪇 𐪃𐪄𐪁𐪅 9

of this tomb 363(A.D.52) year of Nisan month of in

𐪄𐪅 𐪂𐪃𐪆𐪃𐪅 𐪄𐪅 𐪀𐪆𐪇𐪅 𐪄𐪅 𐪆𐪀𐪅𐪄 𐪄𐪅 𐪀𐪆𐪇𐪅 𐪄𐪅 𐪂𐪄𐪁𐪃 10

son of 'Atenatan son of Bonna son of Rabb'el son of Bonna son of Hairan

𐪆𐪅 𐪀𐪆𐪅 𐪁𐪄 𐪀𐪃𐪁𐪃 𐪁𐪆𐪅 𐪄𐪃𐪇 𐪂𐪃 𐪁𐪄 𐪀𐪁𐪄𐪃𐪄𐪃 𐪁𐪃𐪁𐪃 11

for built which Mita Bene tribe of who Palmyrene Taimai

𐪂𐪃 𐪁𐪄 𐪁𐪄𐪇𐪉𐪆𐪅 𐪃𐪄𐪅 𐪀𐪇𐪃𐪆𐪅𐪅 𐪆𐪅𐪇 𐪁𐪇𐪇𐪀𐪅𐪀 12

of who Belshuri daughter of Ba'altega for and his father Bonna

𐪂𐪇𐪇𐪄𐪃𐪁𐪆 𐪁𐪇𐪆𐪅𐪆𐪇 𐪇𐪆𐪇 𐪇𐪃𐪀 𐪆𐪇𐪅𐪁𐪄𐪇 𐪁𐪅𐪅 𐪄𐪇𐪃 13

their honour for his sons for and himself for and his mother Gaddibol Bene tribe

パルミラ語文の読みの方向は、ラテン語・ギリシャ語と異なり、左←右である。

パルミラ語文も、冒頭に、セレウコス暦で「363年ニサン月（西暦52年4月）」と明記している。ギリシャ語文の年月と同一である。数字は、「𐪋𐪈𐪈𐪈 100×3＝300」＋「𐪈𐪈𐪈 20×3＝60」＋「𐪈𐪈𐪈 1×3」＝363と読む。数字の「𐪋」は「100」または「10」を表すが、その位置で両者を判断する。西暦への換算は、ギリシャ語文と同様に、記された数から「311」を引き算（ニサン月の場合）して可能である。なお、同じ碑文中の併記に見えても、内容や年号が異なる場合もあり、本稿でも実例（PAT1356）を紹介する。

9行目の「この墓 𐪇𐪆𐪄 𐪀𐪄𐪅𐪃」という文言は、本碑文が墓自体に置かれたことを明示している。先述のように、墓自体は不明。通例、墓建造碑文は門上部に設置される。

10行目には、ハイランに至る家系を連記している。即ち、「タイマイ𐪁𐪃𐪁𐪃→アテナタン𐪂𐪃𐪃𐪄→ボーナ𐪀𐪆𐪇𐪅→ラブエル𐪆𐪀𐪅𐪄（祖父）→ボーナ 𐪀𐪆𐪇𐪅（父）→ハ

イラン𐫄𐫀𐫆𐫇（本人）」である。6代も家系を記すことは極めて希である。

11行目では、同じく、「パルミラ人」であること、「ベネ・ミタ族」であることを記している。部族名には、「𐫆𐫁𐫄」を付記するものと、しないものがある。「𐫆𐫁𐫄」は「𐫀𐫄 ～の息子」の複数・合成形で、「～の息子達」の意味。ただし、テキストでは「ベネ」とそのまま表記するのが通例となっている。パルミラには、当時、有力な「𐫀𐫇𐫃 𐫅𐫄𐫀𐫅 四部族」がいた。コマラー族がその一つと確認されているが、他は未確定である。マタボール族・マージアン族・ミタ族がその候補である（Schlumberger 1970)。

11行目末から、「父ボーナと、ベネ・ガッディボール族のベルシューリの娘の母バールテガと、自分自身や息子達や彼らの名誉のために建てた」と、建造の目的を具体的に記している。「𐫆𐫀」は関係代名詞で、「which」や「who」に相当。「𐫅𐫁𐫄」は動詞「𐫆𐫁𐫄 建てる」の3人称・男性・単数の完了形。「𐫂𐫃」は前置詞で、「～のために」の意味。主語は、10行目頭の「ハイラン」である。なお、母方のガッディボール族を有力「四部族」の一つとみる見解もある（Cantineau 1930)。

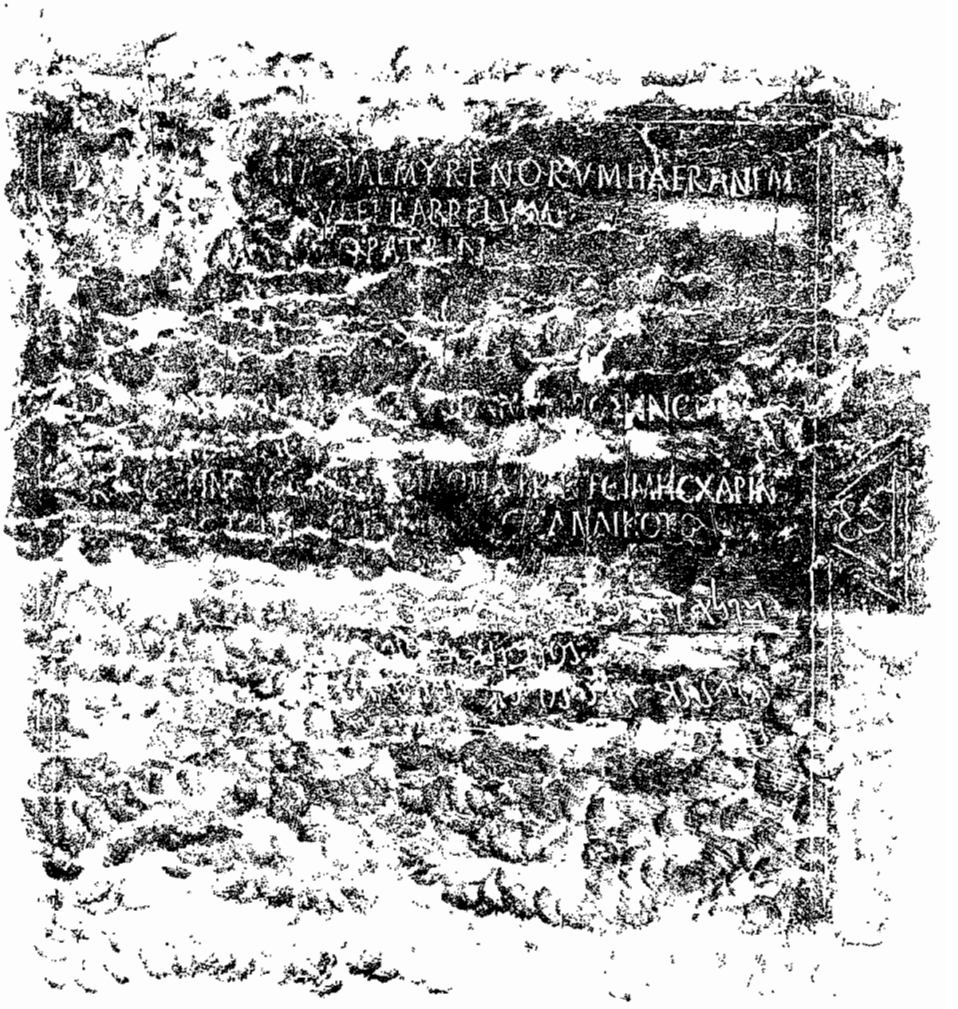
以上、本碑文から得られた情報を簡単に整理する。

（1）ハイランは西暦1世紀中頃に存在したパルミラ人で、ベネ・ミタ族である。
（2）彼は、西暦52年4月に、一族のため墓を建造した。
（3）父はボーナ、母はバールテガである。
（4）父方の家系は、ベネ・ミタ族で、タイマイ→アテナタン→ボーナ→ラブエル（祖父）→ボーナ（父）→ハイラン（本人）である。
（5）母方の家系は、ベネ・ガッディボール族で、ベルシューリ（祖父）→バールテガ（母）→ハイラン（本人）である。

「元老院と人民」によるハイラン顕彰碑（TADMOREA 2B)

円形劇場の南外側、いわゆるゼノビア城壁の外側に近接する円柱に刻まれた顕彰碑文である（第2図)。パルミラの「元老院と人民 𐫁𐫉𐫀𐫈 𐫅𐫂𐫈𐫄」が建てたもの。今日、原位置に建っているが、柱の上半は欠失している。ハイラン像も不明。建造碑文と同様のカルトゥーシュ（碑文枠）内に、ラテン語（1～3行目)・ギリシャ語（4～7行目)・パルミラ語（8～11行目）の三カ国語併記がされている。風化で不明部が多く、約70年前の Cantineau (1933) による解読テキストが有効である。本稿では、それと筆者の拓本を重ねて検討する。不明の［　］内には、彼の復元案をそのまま補記した。

なお、Cantineau のテキストにはいくつか問題点もある。例えば、下記のラテン語文の1・



第２図（拓本は上下合成）

２行目の矢印部分は、彼が「Ｉ」と判読した文字を、筆者が「Ｅ」と確認し訂正したもの。ただし、文意に大きな影響はない。

ラテン語文

1　BV[LE ET CI]VITAS・PALMYRENORVM HAĒRANEM
　Senate　and　People　of palmyrenes　for Hairan

2　BO[NNAE F (ILIUS)] QVI・ ET・RABBĒLVM
　of Bonna　son　who is　and　of Rabb'el

3　PIVM　[ET　PHI]LOPATRIN
　faithful　and　lover of homecity

1行目は、「パルミラの元老院と人民がハイランのために BVLE ET CIVITAS PALMYRENORVM 」と記している。「HAERANEM」は「HAERANES」の対格形で、「ハイラン𐫁𐫄𐫂𐫅」のラテン語風表記である。紀元1世紀中頃、パルミラでは、既にギリシャ風の「元老院と人民」制度が確立していた。この制度の概要は、後で紹介する「パルミラ関税法」(西暦137年4月18日布告) の冒頭に記されている。「元老院と人民」が、パルミラにおける最高の政治機関 (小玉 1994) である。従って、この機関による顕彰碑は、当地で最高の栄誉ということになる。

2行目には、ハイランがボーナの息子で、「ラブエルRABBEL𐫇𐫉𐫄𐫄」の異名 (ニックネーム) をもつことを特記している。「ラブエル」はハイランの祖父の名前である。当地では、祖父の名前を受け継いで、同名にする場合も多い。三ヶ国語文とも異名を特記しており、日常的に、本名ボーナより異名ラブエルで呼ばれていたのであろう。

「QVI (関係代名詞)・ET (接続詞)・RABBELVM (人名・対格)」は「またラブエルであるところの」といった意味。この文言は父ボーナにかかる単語配列だが、ハイランの異名とみるのが通例である。Cantineau の見解を示す。

> 「A en juger par l'emploi de l'accusatif, Rabb'l est le surnom de Ḥairân, et non celui de son père Bônnê」(Cantineau 1933: p.176)

3行目には、「PIVM ET PHILOPATRIN 誠実かつ祖国を愛する」と、ハイランの人物像を抽象的かつ簡略に記している。「PIVM」は「誠実・正義・公平」の意味。「PATRIN」は「PATRIA祖国・故郷」の対格で、ここではパルミラ (地元名はタドモル) のことである。

ギリシャ語文

4　H [BOΤΛ]H KAI O [ΔHMOC] AIPANHN BWNNEO[ΤC]
　The　Senet　and the　People　for Hairan　of Bonne

5　[TON KAI P]ABBHΛON
　him　and　to Rabb'el

6 K[OCMH]THN EYCE[BH] KAI [ΦΙΛ]OΠATPIN

decorator faithfull and lover of homecity

TEIMHC XAPIN

in his honour

7 [E]TOYC EΠT' MHNOC ΞANΔIKOYΦ

year 385 (A.D.74) month of Ksandikos

ギリシャ語文は、左半分に不明部が多い。4行目は、ラテン語とパルミラ語文と対照し、「H BOYΛH KAI O ΔHMOC AIPANHN 元老院と人民がハラインのために」を復元できる。行末は父「ボーナBWNNEOYC」である。

5行目の頭は不明だが、かつてCantineauは「TON KAI P」と復元した。だが、本人も承知のように、実際には、「7字」の挿入は無理であろう。碑石には「4字」程度の空白しかない。後続する「PABBHΛON」の「P－」は確実なので、残り「3字」程度の単語が切望される。別案が必要だが、本稿に影響ないので稿を進める。後の「PABBHΛON」は、ハイランの異名（ラブエル𐪘𐪀𐪅𐪚）の対格形である。なお、この行は極めて短かい。次行の頭に重要な単語を記す必要があったのだろうか。

注目すべき6行目頭の単語は、残念ながら、両端の文字（K[・・・・・]HN）が判読できるだけである。Cantineauは、これを「K[OCMHT]HN」と復元し、「装飾家 décorateur」と解釈した。以降、ハイランの「職業」を神殿装飾家とみる見解が踏襲され、今日でも有力な説となっている。パルミラ博物館のカタログも、この見解を踏襲している。後で述べるが、やや異なった見解もある。文脈から判断して、ここに「身分・職業」に関する単語を置くこと自体には何らの問題はない。Cantineauによるギリシャ語文の仏訳とコメントを紹介する。

「Le Sénat et le Peuple à Ḥaîrân, fils de Bônnê, surnommé Rabb'l, décorateur dans les édifices des dieux et qui aime sa patrie; ils lui ont élevé cette statue pour l'honorer au mois Nîsân l'an 385 (avril 74)」(Cantineau 1933: p.176)

「Au début de la ligne 3, j'ai restitue κ[οσμητ]ῆν, d'après le texte palmyrénien」(Cantineau 1933: p.176)　(註「ligne 3」とは6行目のこと)

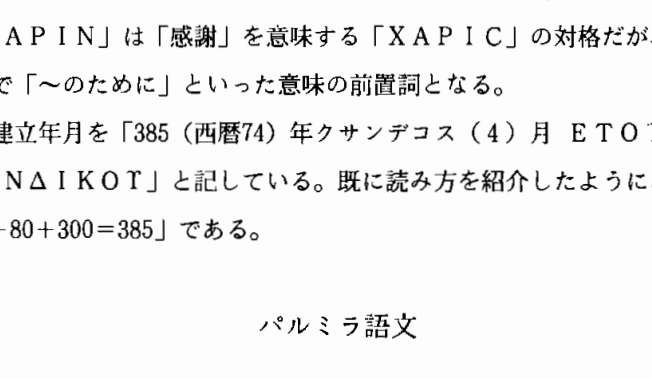
ただし、若干の問題もある。Cantineau の案は、不明部に「5字」を挿入（K[OCMHT]HN）することが不可欠である。また、拓本では、「K・・・THN」と読める。従って、この点では問題はない。ただし、「K」と「T」間は概ね「3字」分で、「4字」の挿入はかなり窮屈である。同案を否定するものではないが、この点で再検討が必要である。これに対し、Posenthal は、「K・・・THN」を、「K[TIC」THN」と復元し、「創立者・復興者（対格）」と理解した（Rodinson 1950; p.140）。同案は、単語の意味の是非は別として、「字数的」には妥当である。ただし、後で紹介するパルミラ語文の内容（9行目）とは、ややかけ離れてくる。こうした点では、前者の方がより妥当である。いずれにしても、「KOCMHTHN」に類似の単語が刻まれていたと考えられる。

続く「ETCEBH KAI ΦΙΛΟΠΑΤΡΙΝ 敬虔かつ祖国を愛する」は、ラテン語文と同様、ハイランに関する抽象的な形容語である。

そして、建立が、「TEIMHC XAPIN（ハイランの）名誉のために」であると付記している。「XAPIN」は「感謝」を意味する「XAPIC」の対格だが、「～（属格）＋XAPIN」で「～のために」といった意味の前置詞となる。

7行目に、建立年月を「385（西暦74）年クサンデコス（4）月 ETOTC EΠT' MHNOC ΞANΔIKOT」と記している。既に読み方を紹介したように、数詞の「EΠT'」は、「5＋80＋300＝385」である。

パルミラ語文



8 Rabb'el nicknamed who Bonna son of Hairan for People and The Senate

9 lover of and of Gods buildings in his decorations

10 his honor for this statue him for erected his city

11 385(A.D.74) year of Nisan month of in

左半分がかなり不明。冒頭は、上記のラテン語文とギリシャ語文を参照して、「元老院と

人民がラブエルと呼ばれた、ボーナの息子ハイランのために」と復元できる。

9行目が、ギリシャ語文の6行目に該当する問題の個所である。「𐡠𐡥𐡩𐡡𐡥」は「𐡠」＋「𐡥𐡩𐡡𐡥」の構成。「𐡥𐡩𐡡𐡥」は「𐡠𐡩𐡡𐡥 浮き彫り・像」の複数・絶対形で、「𐡠－」は、3人称・単数・所有格の接尾辞。「彼（ハイラン）の装飾」とは、「ハイランが奉納した装飾」を意味する。この単語は、ギリシャ語文の「装飾家」とはニュアンスがやや異なる。ギリシャ語文の「装飾家」は、「装飾を寄進した人」の意味か。

次の「𐡡𐡩𐡡𐡩𐡡𐡡」は、「𐡡𐡡𐡩𐡡 建物」の複数・合成形である「𐡡𐡩𐡡𐡩𐡡」に、「～の中（in）」を意味する前置詞の接頭辞「－𐡡」が付いたもの。続く「𐡢𐡡𐡠𐡥𐡢」と復元された個所は、「𐡠𐡥𐡢 神」の複数・強意形。併せると、「神々の諸建物内」の訳が得られる。神殿名は不明。おそらくベール神殿であろう。

こうしたことから、ハイランが諸神殿内の装飾を寄進した功績を称え、「元老院と人民」が彼の顕彰碑文を建てたという脈絡で理解できよう。

ここで、9行目の「𐡠𐡥𐡩𐡡𐡥」を「その装飾家」と読みとる Cantineau の見解を紹介しておく。ついては、「𐡥𐡩𐡡𐡥」を「装飾」でなく、「装飾家」とみる。従って、「𐡠－」を「彼（ハイラン）の～」でなく、「都市パルミラの～」とか「元老院と人民の～」など、装飾家の「所属機関」を意味する、三人称・単数・所有格・接尾辞と理解する必要がある。ただし、「𐡥𐡩𐡡𐡥」を「装飾家」とするパルミラでの用語例は、筆者が情報収集した限り、知られていない。

> Il n'est pas sans présenter quelques difficultés; on attendrait d'abord 𐡢𐡥𐡩𐡡𐡥 à l'état emphatique: 𐡠𐡥𐡩𐡡𐡥 paraît vouloir dire《son décorateur》celui de la cité de Palmyre－à moins qu'on ne pense à une construction analogue à 𐡢𐡡𐡠𐡥𐡢 𐡡𐡩𐡡𐡩𐡡 𐡡𐡩 𐡠𐡥𐡩𐡡𐡥, mais une semblable construction avec la préposition －𐡡 ne semble pas attestée par ailleurs.
>
> (Cantineau 1933; p.176) パルミラ文字は筆者による

「装飾家」説に異論を唱える見解、例えば、Teixidor (1979) のコメントを紹介する。

> In this badly preserved inscription, Gawlikowski (*Le temple,* p.71) and Colledge (*Art of Palmyra,* p.237), accept Cantineau's rendering of 𐡠𐡥𐡩𐡡𐡥 as "decorator," but Milik's interpretation of the term as meaning "decorations" (*Dédicaces,* p.226) seems more compatible with the fact that Hairan is nowhere also described as decorator. (Teixidor 1979; p.4)

そもそも、「𐪀𐪇𐪄𐪀」は、Cantineauが「－𐪄－」だけを読みとって復元（拓本では𐪄は不明）したもの。従って、その単語でも別の単語でもよい。次に紹介する碑文（PAT1356）は、ベール神殿の祭司達がハイランの寄進に感謝し、顕彰碑を建てたことを明記している。この事実を重視すると、「𐪄・」を「𐪄𐪅 ベール」とみる案が浮上する。ついては文脈上の問題ない。その後の部分「𐪀𐪇－」も白紙に戻し、しかるべき「3字」の単語を探すことも可能である。ただし、拓本では「𐪀・・」と読みとれる。

また、「𐪃𐪇𐪈𐪊𐪆」は、接頭辞の「－𐪆 そして・かつ（and）」と形容詞の「𐪃𐪇𐪈𐪊 ～を愛する」の構成。10行目頭の単語を併せ、「かつ彼の都市（パルミラ）を愛する」云々となる。従って、「𐪀・・」には、「𐪃𐪇𐪈𐪊」と併存できる意味の単語（ハイランを形容する単語）が期待され、「・・・かつパルミラを愛する」云々の文脈の中でそれを探し出せばよい。ここで、「𐪀・・」を特定すべく、三カ国語併記の該当部を対照させる。

【ラテン語】 PIVM [ET PHI]LO PATRIN
faithful and lover of homecity

【ギリシャ語】K[・・・]HN ETCE[BH] KAI [ΦIΛ]OΠATPIN
decorator ? faithfull and lover of homecity

【パルミラ語】（ラテン語・ギリシャ語とは読みの方向は逆）
𐪇𐪈𐪃𐪇𐪄𐪃 𐪃𐪇𐪈𐪊𐪆 [𐪀・・] [・・] 𐪇𐪇𐪃𐪅𐪅 𐪇𐪈𐪅𐪈𐪃
his city lover and faithful ? Bel ? buildings in his decorations

パルミラ語の「𐪀・・」は、ラテン語の「PIVM faithful」とギリシャ語の「ETCEBH faithful」に対応する単語（「誠実な」）であろう。該当部は、「誠実かつパルミラを愛する」。「誠実」に該当するパルミラ語は、通例、「𐪀𐪇𐪄𐪀 𐪄𐪈𐪊 神々を敬う」が思い浮かぶ。だが、2単語で合わせて8字である。残念ながら、字数の点で、これを挿入できる余地はない。対応する1語の単語は未詳で、依然として別案が必要である。Gawlikowskiのコメントを紹介する。パルミラ文字は酒井による。

D'après la remarque pertinente de J. Starcky on peut également restituer 𐪄𐪅 𐪇𐪇𐪃𐪅𐪅, 《dans les édifices de Bel》. Dans ce cas, la lacune de 3-4 letters a du contenir un mot correspondant à *ευσε* [*βῆ*] *et pium*, mais cette notion s'exprime en palmyrénien par 𐪀𐪇𐪄𐪀 𐪄𐪈𐪊, 《qui craint les dieux》, beaucoup

trop long. (Gawlikowski 1973; P.71)

10行目の「𐏐𐏑𐏒𐏓𐏔」は動詞（能動使役・男・複数）で「建てた」の意味。単数形は「𐏑𐏒𐏓」である。主語は「元老院と人民」で、もちろん建造の主体者である。直接目的語は「𐏔𐏕𐏖 𐏗𐏑𐏘𐏙 この像（ハイラン像）」。従って、ハイラン像の建立に伴う碑文であることを明示している。残念ながら、顕彰碑の上半は欠損し、ハイラン像も不明である。更に「𐏔𐏖𐏓𐏒𐏘 彼（ハイラン）の名誉のために」との文言が続いている。

11行目は、建造年月が、セレウコス暦の「385年ニサン月」（西暦74年４月）であると明記。ギリシャ語文と同一の年月である。

以上、本碑文から得られた情報を簡単に整理する。

（１）ハイランは、広く「ラブエル」の異名で呼ばれていた。
（２）彼は、諸神殿内部の装飾を寄進した（あるいは「神殿装飾家」であった）。
（３）彼は、誠実かつパルミラを愛する人物であった。
（４）パルミラの「元老院と人民」がハイランの顕彰碑（円柱・像・碑文）を建てた。
（５）それは西暦74年４月であった。

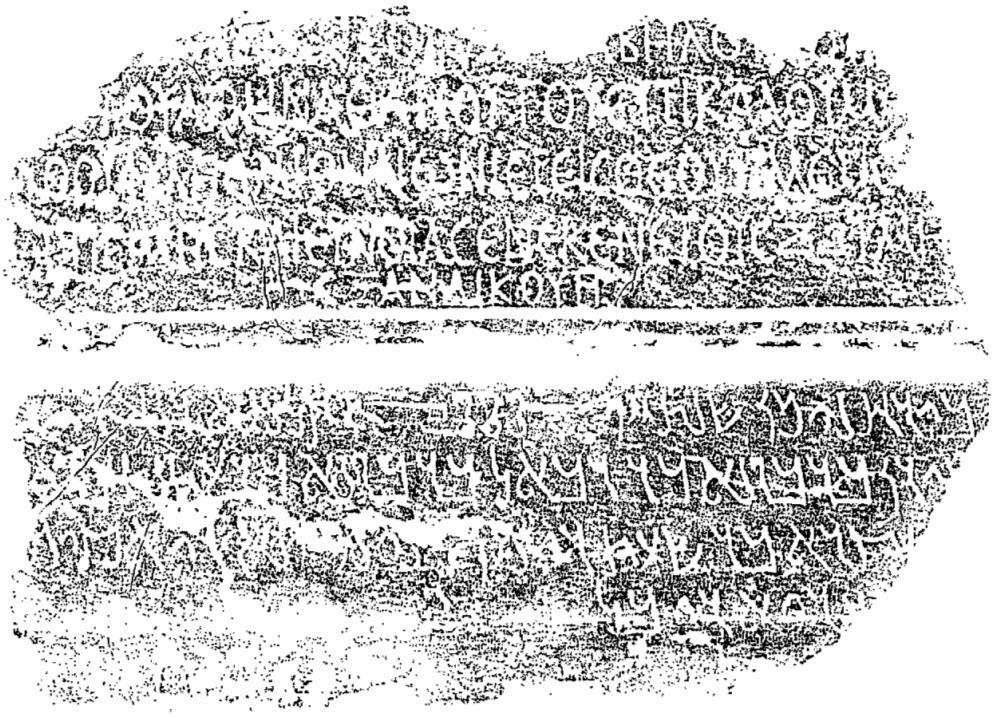
ベール神殿祭司達によるハイラン顕彰碑（PAT1356）

ベール神殿境内の柱廊列柱の持ち送り部に刻まれたハイランの顕彰碑（第３図）。ベール神殿の祭司達による。今日、持ち送り部だけ単独で境内にある。どの柱かは不明。南側柱廊の一本か。ギリシャ語文（１～４行）とパルミラ語文（５～８行）の二カ国語である。上部と両側が欠損しているが、文言の復元は容易である。両語文で年号が異なることが注目される。ギリシャ語文は「西暦56」年に刻まれ、後にハイラン像が「西暦60年」に建てられた。

なお、ベール神殿はパルミラにおける中核施設である。紀元前１世紀に存在していた元の「旧神殿」と、「西暦32年」に拡張・再建された「新神殿」がある。

ギリシャ語文

1 [A I P A N H N B W N N E] O Υ C [T O Υ P A B] B H Λ O Υ [T O Υ B W N-
for Hairan of Bonne his of Rabb'el his Bon-



第3図

2 NEOYC] TOY AΘHNAΘANOY TOY EΠIKAΛOYME[NOY

-ne his of 'Atenatan his nicknamed

BAP]

Bar-

3 [CAA]ΘOY ΦYΛHC MIΘHNWN IEPEIC ΘEOY

-sa'at tribe of Mita priests God of

MEΓIC [TOY ΔIOC]

of maximum Zeus

4 [BHΛOY] TEIMHC KAI EYNOIAC ENEKEN ETOYC

of Bel for his honor and as a token of good will year

ΖΞΤ' MH[NOC]

367(A.D.56) month

5 ΞΑΝΔΙΚΟΥ Η'

of Ksandikos 8 th.day

1～2行目に、「アテナタンの息子ボーナの息子ラブエルの息子ボーナの息子ハイランのために」と記している。ここで、遠き先祖の「ΑΘΗΝΑΘΑΝΟΥアテナタン」のことを、「ΕΠΙΚΑΛΟΥΜΕΝΟΥ ΒΑΡ CΑΑΘΟΥ バール・シャヤトと呼ばれた」と異名を特記している。パルミラ語文でも同様なので、祖先アテナタンに何か特別な伝承があったと思われる。3行目に、「ミタ族」だと記している。

3行目末に、それが「ベールの祭司達」によると記しているが、動詞や直接目的語に相当する単語は省略している。なお、碑文が記される柱廊の柱自体は既に建っているので、独立した顕彰碑のように、新たに建てる必要はない。

なお、「ベール神」の形容語として「最高神ゼウス」を用いている。「ΙΕΡΕΙC」は「ΙΕΡΕΥC司祭・神官」の複数形。「ΘΕΟΥ」は「ΘΕΟΥ神」の属格。「ΜΕΓΙCΤΟΥ」は「ΜΕΓΑC偉大な」の最上級・属格。「最も偉大な・最高の」の意味である。「ΔΙOC」は最高神「ΖΕΥCゼウス」の属格。4行目の「ΒΗΛΟΥ」は、パルミラの有名な最高神「ベール𐪁𐪄𐪇」の属格である。

4行目の、「ΤΕΙΜΗC ΚΑΙ ΕΥΝΟΙΑC ΕΝΕΚΕΝ」は「(彼の) 名誉と善意故に」の意味。Teixidor (1979; p.5) は、別の碑文で、それを意訳し、「for his honor and as a token of good will」と英訳している。本稿は同文を付記しておく。「ΤΕΙΜΗC」は「ΤΙΜΗ名誉」の属格。「ΕΥΝΟΙΑC」は「ΕΥΝΟΙΑ善意・誠意」の属格。「ΕΝΕΚΕΝ」は「ΕΝΕΚΑ～故に」の叙事形である。

最後、即ち4行目末～5行目に、この建立が「367年クサンディコス月 (西暦56年4月) 8日」であると明記している。日付まで記している碑文は極めて希である。

なお、パルミラでは「4月7日」が毎年の重大な祭日である。ちなみに、ベール神殿は、「西暦32年4月6日」に建立された (小玉 1994; 183頁)。4 (ニサーン) 月は、各種のイベントが集中し、ハイラン自身の墓建造碑文も、パルミラの「元老院と人民」によるハイランの顕彰碑も、共に4月である。墓建造碑文の多くは、4月付けである。

[𐫀]𐫁 𐫂𐫃𐫄 𐫅𐫆𐫇𐫈 𐫉𐫊𐫋𐫌𐫍𐫎𐫏𐫐 𐫑𐫒𐫓𐫔 𐫕𐫖𐫗𐫘 11

of this statue 371(A.D.60) year of Nisan month of in

𐫙𐫚 𐫛𐫜𐫝𐫞 𐫟𐫠 𐫡𐫢𐫣𐫤 𐫦𐫥 𐫧𐫨𐫩𐫪 𐫫𐫬 𐫭𐫮𐫯𐫰 𐫱𐫲𐫳𐫴 12

who 'Atenatan son of Bonna son of Rabb'el son of Bonna son of Hairan

[𐫵]𐫶𐫷 𐫸𐫹 𐫺𐫻𐫼𐫽 𐫾𐫿 𐬀𐬁𐬂 𐬃𐬄 𐬅𐬆 𐬇𐬈 𐬉𐬊 𐬋𐬌𐬍𐬎[𐬏𐬐] 13

erected which Mita Bene tribe of who Br-s'at nicknamed

𐬑𐬒 𐬓𐬔 𐬕𐬖𐬗𐬘[𐬙 𐬚] 14

Bel of priests him for

冒頭に、「371年ニサン月（西暦60年４月）」と建立年月を明記している。日付けの表記はない。そして、これは、ギリシャ語文の「367年クサンデコス月（西暦56年４月８日）」とは明らかに異なる。

両文による限り、ベール神殿の祭司達が、何かを契機に、先ずハイランの顕彰碑文をギリシャ語文で刻み、４年後の別の契機に、持ち送り部にハイラン像を立て、同時にパルミラ語文を刻んだことになる。同時に、「この彫像 𐫂𐫃𐫄 𐫅𐫆𐫇𐫈を・・𐫵𐫶𐫷 建てた・・・𐬑𐬒 𐬓𐬔 𐬕𐬖𐬗𐬘 ベールの祭司達が」の文言は、この時点でハイラン像を立てたことを明示している。従って、ギリシャ語文が刻まれた「西暦56年４月８日」から４年間は、持ち送り部にハイラン像は建てられていなかったことになる。

12行目は、「アテナタン→ボーナ→ラブエル→ボーナ→ハイラン」と、５代まで遡って系譜を記している。ハイランの墓建造碑文でみた家系と合致する。なお、「𐫙𐫚」は関係代名詞。ここでは「who」のように機能する。「𐫭𐫮𐫯𐫰 𐫱𐫲 𐫳𐫴𐫵𐫶𐫷 𐫙𐫚 ～」は、「バール・シャヤトと呼ばれたところの」の意味。先述のように、はるか祖先の人名にニックーネームを、パルミラ語文でも特記していることに注目される。

なお、「異名＋ 𐫳𐫴𐫵𐫶𐫷 𐫙𐫚＋人名」を記すには、次のような二つの用法（A・B）がある。本碑文は、「𐫙𐫚」の直前の人名「アテナタン𐫛𐫜𐫝𐫞」にかかる用法（A）で、「バール・シャヤトと呼ばれたアテナタン」云々となる。先の碑文（TADMOREA 2Bの８行目）のように、「𐫙𐫚」の直前でなく、以前に記された人名にかかる用法（B）である。下の用法Bでは、「ラブエルと呼ばれた（ボーナの息子）ハイラン」云々となる。

《用法A》 𐣠𐣲𐣱 𐣲𐣳 𐣰𐣲𐣠𐣠𐣰 𐣲𐣲 𐣡𐣠𐣥𐣠𐣲 ・・（人名）・・

バール・シャヤト と呼ばれた ところの アテナタン（の息子の・・・）

《用法B》 𐣤𐣰𐣥𐣲 𐣰𐣲𐣠𐣠𐣰 𐣲𐣲 𐣰𐣥𐣡𐣥 𐣲𐣥 𐣡𐣲𐣲𐣢

ラブエル と呼ばれた ところの（ボーナ の息子） ハイラン

両者に関しては、時に混乱を招くことがある。ただし、本碑文は、既にハイランの異名が「ラブエル」と判明しており、「バール・シャヤト」は「アテナタン」の異名であると導き出せる。以下、「ミタ族」だと付記している。

12行目末の「𐣲𐣲」は関係代名詞で、ここでは「which」のように機能する。「𐣠𐣲𐣠𐣰」は動詞「𐣠𐣲𐣠 建てる」の使役・複数形。主語は、14行目の「𐣤𐣥 𐣲𐣲 𐣰𐣲𐣲𐣠𐣥 ベールの祭司達」。直接目的語は、11行目の「ハイランのこの像 𐣡𐣲𐣲𐣢 𐣲𐣲 𐣳𐣥𐣲 𐣰𐣠𐣤 𐣢」。動詞の後に「𐣳𐣤 彼（ハイラン）のために」を挿入している。

以上、本碑文で新たに把握できたことを整理しておく。

（1）ハイランがベール神殿や祭司達に何か感謝されるべき大きな貢献をした。
（2）ベール神殿の祭司達が、柱廊にハイランの顕彰碑文をギリシャ語で刻んだ。
（3）それは西暦56年４月８日であった。
（4）４年後、何かの契機に、彼らが、そこにハイラン像を建て、パルミラ語文を刻んだ。
（5）それは西暦60年４月であった。
（6）先祖のアテナタンの異名は「バール・シャヤト」であった。

ハイランの系譜と時間的位置

以上、ハイランに関する三つの碑文から、彼に至る系譜を整理し、その時間的枠組をおおまかに把握しておく。右側の年代はざっと「仮定」される各者の生年である。

［ベネ・ミタ族］

タイマイ　　B.C.130

↓

（バール・シャヤト）アテナタン　　B.C 100

↓

ボーナ	［ベネ・ガディボール族］	B.C.70
↓		
（祖父）ラブエル	ベルシューリ（母方の祖父）	B.C.40
↓	↓	
（父）ボーナ	バアルタガ（母）	B.C.10
↓	↓	
（ラブエル）**ハイラン**		A.D.20
↓		
息子達		A.D.40

○西暦52年４月に、ハイランが、一族のため墓を建造した。

○西暦56年４月８日に、ベール神殿の祭司達が、ハイラン顕彰碑文を刻んだ。

○西暦60年４月に、ベール神殿の祭司達が、ハイラン像を建て顕彰碑文を刻んだ。

○西暦74年４月に、「元老院と人民」が、ハイラン像を建て顕彰碑文を刻んだ。

「西暦52～56年」頃に、莫大な費用を伴う墓建造や諸神殿への大寄進を行ったハイランは、当時、何歳だったのか。不明だが、極めて高い社会的・経済的地位にあったことは確かである。かかる実状は、年齢をより高く推定する方が合理的である。

一方、一族用の墓造営が、「父母のためや息子達のため」という目的をもっていた。パルミラでは納体室への直葬が基本で、墓建造時点で彼の父母が生存していた可能性がある。即ち、その時点で、彼が極端に高齢であったとは考えにくい。

かかる状況を加味して、彼は墓建造時点で「30歳程度」、神殿への寄進時点で「40歳弱」、従って「西暦20年頃」に生まれたと仮定しておく。これを仮の定点とし、ハイラン系譜の各者が「30歳程度」で息子を得たとみると、上記のような大まかな「時間的枠組」が「目安」として与えられる。

なお、「西暦56年」時点では、ハイランの顕彰碑文が刻まれたが、敢えて彼の像は建てられなかった。そして、「西暦60年」に、祭司達がそこへハイラン像を建てたのである。顕彰人物像の建立が、通例、対象者の生存中か死亡後かは未確認だが、像建立前に本人が死去した可能性もあろう。なれば、ハイランは「40歳程度」と仮定できる。

今日、パルミラ最古の碑文（PAT1524 パルミラ博物館蔵）は、「紀元前44年10月」付けの、旧ベール神殿の祭司達がベネ・カヒナブ族のネブザバドの息子ゴライマイのために彫像を建てたことを示すものである。従って、タイマイからラブエルに至る人物は、パルミラ碑文前史を伺う上で重要な情報となる。

パルミラ関税法碑文（PAT0259）

これから紹介する各種の碑文は、ハイランや彼の系譜に関係する可能性が高いが、その関係は未確定である。上記の三碑文の内容と重ねて論考を進めていく。

先ず、有名な「パルミラ関税法碑文」（CIS 1926）である。パルミラの元老院が、「448（西暦157年）ニサーン月第18日」に布告したもの。今日、ロシアのエルミタージュ美術館が所蔵している。1881年、アゴラに隣接する付属建物の南側で発見されたという。4枚の石灰岩板石（全体の幅4.8m、高さ1.75m）に、ギリシャ語文とパルミラ語文で、1～109条の条文が記されている。かのハイランとの関係が考慮される部分を抜粋（第1碑石のギリシャ語文1～4行。同パルミラ語文1～行）し紹介する。この中に、「ハイランの息子ボーナの息子ボーナ」が「元老院の議長職」として登場する。このボーナの祖父が、かのハイランに該当する可能性が高い。

なお、「パルミラ関税法」に関して、小玉新次郎著『隊商都市パルミラの研究』）に和訳が掲載され、かつ詳細に解説されている（1994; 78-119）。「元老院」の会議は、議長が主催し、元老院議員に加えて、書記と2名の執政官が参加した。

ギリシャ語文

1 [ΕΤ]ΟΥϹ ΗΜΥ ΜΗΝΟϹ ΞΑΝΔΙΚΟΥ ΙΗ ΔΟΓΜΑ ΒΟΥΛΗϹ
the year 448(A.D.137) the month of Ksandikos 18 th the decree the Senate

2 ΕΠΙ ΒΩΝΝΕΟΥϹ ΒΩΝΝΕΟΥϹ ΤΟΥ ΑΙΡΑΝΟΥ
during Bonna Bonna his of Hairan

ΠΡΟΕΔΡΟΥ ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ ΤΟΥ
presidency of of Alexandros of Alexandros his

3 ΦΙΛΟΠΑΤΟΡΟϹ ΓΡΑΜΜΑΤΕΩϹ ΒΟΥΛΗϹ ΚΑΙ ΔΗΜΟΥ
Philopator Secretary Senate and People of

ΜΑΛΙΧΟΥ ΟΛΑΙΟΥϹ ΚΑΙ ΖΕΒΕΙΔΟΥ ΝΕϹΑ ΑΡΧΟΝ－
of Malku Olai and of Zebida Nesha of archons

4 TWN BOΥΛH[C] NOMIMOΥ AΓOMENHC EΨHΦICΘH TA

the Senate of law was assembled has decided what

ΥΠOΥEΥAΓMENA （以下略）

below is written

ギリシャ語文の冒頭には、「448（西暦137）年 クサンディコス月 第18日」と「関税法」の布告年月日を明記している。

2行目頭の「EΠI」は、人名の前について監督任務中を指す。人名の後の「議長の ΠPOEΔPOΥ」にかかり、「議長職中」といった意味合い。その人物は、「ハイランの息子ボーナの息子ボーナ」である。その人名で明らかなように、議長職のボーナが、かのハイランの孫でないかと仮定される人物である。言い換えると、この議長職ボーナの祖父が、かのハイランに該当する可能性がある。

3行目の「ΓPAMMAΥEWC」は「書記」。「BOΥΛHC KAI ΔHMOΥ」は「元老院と人民の」。合わせて「元老院と人民の書記の」。その職にある人物は、その前の人名「フィロパトールの息子アレキサンデルの息子アレキサンデル」である。

続く人名は、「オライの息子マリクー」と「ネシャーの息子ゼビダ」で、その職は「APXONTWN 執政官（複・属）」である。

4行目の「AΓOMENHC」は、動詞「AΓW 集める」の受動・分詞で、パルミラ語の「𐡀𐡥𐡲 𐡶𐡶 召集された」に対応。「EΨHΦICΘH」は、動詞「ΨHΦIZW決定する」の完了形で、「𐡥𐡲𐡥𐡀決定した」に対応。「TA ΥΠOΥEΥAΓMENA」は、「下記のこと（条文）」云々で、「𐡥𐡥𐡥𐡥 𐡶𐡶 𐡶𐡥𐡥𐡶 𐡥𐡲𐡶」に対応する。「ΥΠO」は「～の下に」を意味する前置詞・接頭辞である。

パルミラ語文

𐡥𐡶𐡥 𐡶𐡶𐡶𐡶 𐡶𐡲𐡥 𐡶𐡶𐡥𐡶 𐡥𐡲𐡥𐡶 𐡀𐡥𐡲𐡶 𐡥𐡲 𐡀𐡶𐡺𐡲 1

year of 18 th day Nisan month of in the Senate of the decree

𐡲𐡶 𐡀𐡶𐡲𐡶 𐡥𐡲 𐡀𐡥𐡲𐡲𐡥𐡶𐡶𐡶 𐡶𐡶𐡶𐡶𐡶𐡶𐡶𐡶

son of Bonna of the presidency during 448(A.D.137)

𐡠𐡩𐡩𐡠𐡥𐡩 𐡩𐡩 𐡠𐡩𐡩𐡠𐡥𐡩 𐡠𐡩 𐡩𐡠𐡥𐡩𐡩𐡩𐡩 𐡠𐡩𐡩𐡠𐡩 𐡠𐡩𐡩 𐡩𐡩𐡠𐡩 2

Alexandros son of Alexandros of the term of secretary and Hairan son of Bonna

𐡩𐡠𐡩𐡠𐡩𐡩𐡩𐡠 𐡠𐡩𐡩𐡠 𐡩𐡠𐡥𐡠𐡩 𐡠𐡩 𐡠𐡠𐡥𐡩𐡩𐡩 𐡩𐡩𐡠𐡥𐡠𐡩 𐡩𐡩

the archon and People and the Senat of sercretary Philopator son of

𐡩𐡠𐡩 𐡩𐡩 𐡩𐡥𐡠𐡩 𐡩𐡩 𐡩𐡩𐡠𐡩𐡠𐡩 𐡠𐡩𐡠𐡩𐡩 𐡩𐡩 𐡠𐡠𐡥𐡩 𐡩𐡩 𐡠𐡩𐡥𐡩 3

was when Nesha son of Zebida and Moqimu son of Olai son of Malku

𐡩𐡩𐡥𐡩 𐡩𐡠𐡠𐡩𐡩𐡠 𐡠𐡩 𐡩𐡥𐡠𐡠𐡩 𐡩𐡥𐡠𐡩

decided the law by assembled the Senate

（以下略） 𐡩𐡩𐡩𐡥 𐡠𐡩 𐡠𐡠𐡩𐡩 𐡠𐡩𐡩 4

below is written what

パルミラ語文も、「西暦157年ニサン月第18日」と明記している。

続いて、公布関係者が登場する。注目すべきは、「議長職、ハイランの息子ボーナの息子ボーナ」である。このハイランこそ、かのハイランでないかと想定される人物である。次いで、「元老院と人民の書記 フィロパトールの息子アレキサンドロスの息子アレキサンドロス」が登場する。そして、「執政官 モキムの息子オライの息子マリクとネシャの息子ゼビダ」である。

後の「𐡩𐡩」は接続詞で「～の時」の意味。「𐡩𐡩𐡩」は、いわゆる「be動詞」のような役割の「𐡩𐡩𐡩」の、3人称・女性・単数形である。「𐡥𐡥𐡠𐡩𐡩」は「𐡥𐡩𐡩 集める」の分詞・受動・女性・単数・絶対形。「𐡠𐡠 𐡠𐡩」は前置詞で、ここでは「～によって」。「𐡥𐡠𐡩 𐡠𐡩」は「𐡠𐡩𐡠𐡩」法律」の強意形。「𐡩𐡩𐡥𐡥」は 使役動詞「𐡩𐡩𐡥 決定する」の完了・3人称・女性・単数形。「𐡠𐡩𐡠」は代名詞で、「～のこと」。「𐡩𐡠𐡩𐡩」は「𐡩𐡩𐡩」書く」の 受動態・分詞。「𐡩𐡩𐡩𐡥 𐡠𐡠」については、「𐡠𐡠」も「－𐡥」も場所を示す前置詞で「𐡩𐡩𐡩」は「下に」を意味する前置詞である。

この「パルミラ関税法」は、かのハイランが活躍した1世紀中頃から、80年程度後に布告された。その年代を踏まえ、関税法碑文の議長職ボーナの祖父がハイランであることから、かのハイランとの関係を、以下のように仮定（仮説1）しておく。

A.D.137

（議長職）

仮説1 ハイラン→ボーナ→ボーナ

タイマイ→アテナタン→ボーナ→ラブエル→ボーナ→ハイラン→息子達

A.D.52・56・60・74

両者の接点をより明確にすべく、その時間的関係を概算しておく。

「西暦137年」には、このボーナは議長職にあった。この時の彼の年齢は不明だが、長老たる議長職を勘案し「50歳程度」と仮定すると、彼は「西暦87年頃」に生まれたことになる。同名の父ボーナが「30歳程度」で、息子ボーナができたとみると、父ボーナは「西暦57年頃」に生まれたことになる。この頃は、かのハイランが一族墓を建造（西暦52年）し、諸神殿に大寄進（西暦56年）し、これに対してベール神殿司祭達や「元老院と人民」が彼に感謝する碑文（西暦56・60・74年）を設置した時代に該当する。そして、墓建造碑文には、かのハイランに「息子達」がいたことが記されている。このような時間的関係から判断しても、両碑文の「ハイラン」が同一人物である可能性は極めて高いのである。

なお、かのハイランの息子達の一人が「ボーナ（議長職ボーナの父）」だったとすると、別の息子「～某」の特定が必要になってくる。

元老院によるアホファリ顕彰碑（PAT0273）

ベール神殿内の顕彰像の礎石で、元老院が「西暦140年」に建てたもの。パルミラ博物館蔵（Chabot 1922; p.42, As'ad and Gawlikowski 1997; P.12)。年代は「パルミラ関税法」（西暦137年）に近い。祭碑形（高さ132cm.）で、上面に二つのほぞ穴がある。碑文では、そこにアホファリ像が立っていた。転用後の発見で、本来の場所は不明。ギリシャ語文の1行目だけ屋根部の平縁にギリシャ語文（1行目）が、柱状部にギリシャ語文（2～8行目）とパルミラ語文（9～14行目）の二カ国語併記がある。

なお、『PAT0273』のテキストでは、ギリシャ語文の1行目と2行目を併せて1行目としている。単なるミスである。「ボーナの息子ハイランの息子シャバの息子ハイランの息子アホファライ」の系譜は、かのハイランとの関係を強く示唆している。

1　H　BOΥΛH

The　Council

2 [AOΦA]ΛEIN AIPANOϒ TOϒ CABA TOϒ

Ahofali of Hairan his Shaba his

3 AIPANOϒ TOϒ BWNNEOϒC EΠANΓEI−

of Hairan his Bonne has endowed

4 [ΛA]MENON AϒTH EΠIΔOCIN AIWNIAN

? him endowment for eternal

5 KAI ΘϒCIAN KAI [ETEPA] ANAΘEMATA

and horocaust and other offering

6 [MA]ΛAXBHΛW KAI TϒXH ΘAIMEIOC K[AI

Malakabel and Tyche Taimi and

7 ATE]PΓATEI ΠATPWOIC ΘEOIC TEIMHC KAI

Atargatis ancestral deities honor and

8 MNHMHC XAPIN ETOϒC ANϒ' ΠANHMOϒ

memory for year 451 (A.D.140) of Panemos(July)

1行目は、単独に「元老院」と刻まれ、最高機関による顕彰であることを誇示している。2行目頭の人名「AOΦAΛEIN」は、「アホファリ ᵔᵕᵓᵓᵕᵔ」のギリシャ語風表記。対格で、「元老院がアホファリに対して」の意味である。以下、ギリシャ語風表記で、「ボーナの息子ハイランの息子シャバの息子ハイランの息子」とアホファリの系譜が記されている。

3行目から4行目の「EΠANΓEI-ΛAMENON」は、動詞の完了形で、パルミラ語文を対照すると、「寄進した・奉納した」の意味である。ただし、筆者に未詳。「AϒTH」は強意代名詞「AϒTOC 彼」の与格で、「彼に」の意味。ここでは「元老院に」を指す。即ち、アホファリが元老院に寄進したことを指す。その内容は、「EΠIΔOC1N AIWNIAN 恒久的な寄付」と、「ΘϒCIAN 全燔祭での焼いた生け贄」と、「ETEPA ANAΘEMATA その他の寄付」である。

実際には神々に奉納したのであって、祖先神「TϒXH ΘAIMEIOC タイミ神」と、太陽神「MAΛAXBHΛW マラクベル」と、豊穣の女神「ATEPΓATEI アタルガ

ティス」という三神が登場する。それらを「ΠΑΤΡWOΙC ΘΕΟΙC 祖先の神々」と総称している。6行目の「ΤΤΧΗ テュケー」は、ローマにおける「運の女神」。

「ΤΕΙΜΗC ΚΑΙ ΜΝΗΜΗC ΧΑΡΙΝ」は「(彼の) 名誉と想い出のために」。「ΧΑΡΙΝ」は、ここでは「〜故に・〜のために」などの意味である。

パルミラ語文

𐏐𐏑 𐏑𐏑𐏒 𐏓𐏐𐏔 𐏐𐏑 𐏔𐏕𐏖𐏗 𐏔𐏘 𐏙𐏚𐏘 𐏗𐏕𐏕𐏖 9

son of Saba Hairan son of Ahofali of this statue

𐏔𐏘 𐏗𐏕𐏔𐏑 𐏙𐏕 𐏖𐏘𐏑𐏚 𐏔𐏘 𐏖[𐏚]𐏒 𐏗𐏚𐏔𐏑 𐏓𐏐𐏔 10

who The Senate him for has built which S'at Bonna Hairan

𐏕𐏔𐏕𐏔 𐏗𐏖𐏔𐏕𐏕𐏔 𐏗𐏕𐏕𐏚𐏕 𐏗𐏕𐏐𐏖 𐏙𐏕 𐏘𐏖𐏕 11

erected and burnt offering and eternity for consecrated object him for has donated

𐏙𐏖𐏚𐏖𐏕𐏔 𐏔𐏕𐏖𐏘𐏖𐏔 𐏕𐏑𐏑𐏕𐏕𐏕 𐏓𐏕𐏐𐏖𐏕 12

Atargatis and Gad Taimi and Malakabel for sanctuary

𐏖𐏐𐏔𐏑 𐏙𐏐𐏕𐏔𐏕 𐏖𐏔𐏕 𐏔𐏘 𐏐𐏖𐏑 𐏗𐏔𐏑𐏓 𐏔𐏙𐏕𐏗 13

month of in his honor for he died that after the good gods of

𐏕𐏕𐏕𐏕𐏕𐏕𐏕𐏕𐏕 𐏖𐏕𐏒 𐏓𐏔𐏕𐏕 14

451 (A.D.140) year of Qenian

冒頭に、「アホファリのこの像」と明記している。9行目から10行目に、「ボーナ・ハイラン・シャバの息子ハイランの息子アホファリ」と系譜が記されている。

注目すべきは、「𐏖𐏚𐏒シャヤト 𐏗𐏕𐏔𐏑ボーナ」の「𐏖𐏚𐏒」である。ついては、「ボーナの父」・「ボーナの異名」・「ボーナの部族」という三つの選択肢がある。両者の間に「𐏐𐏑」の単語がなく、ギリシャ語文には「𐏖𐏚𐏒」に該当する語が省略されている。先に紹介したベール神殿祭司達によるハイラン顕彰碑文 (PAT1356) では、このボーナの父は「アテナタン」である。従って、「ボーナの父」案は可能性が少ない。

Stark (1971; p.115) によれば、「𐏖𐏚𐏒」は、部族名の場合と人名の場合がある。

Teixidor（1979; p.90）は、この前に「𐡠𐡩𐡥 𐡢𐡧𐡣 𐡡𐡥 𐡠𐡢」が省略されているとみて、それを「部族名」と理解している。ただし、かのハイランの系譜は「ベネ・ミタ族」である。上記の碑文では、ハイランの先祖のアテナタンは、「ベネ・ミタ族」であると共に、異名が「𐡧𐡩𐡢 𐡢𐡥 （「シャヤトの息子」の意味）」と特記している。これを踏まえると、アテナタンと同様に、彼の息子ボーナも、「シャヤト」を異名としていたのではないかと考えられる。ともあれ、かかる名称の共通性は、本碑文が、かのハイラン系譜と強く関係する可能性を示している。

10行目の後半は、これを「元老院がアホファリのために建立した」ことを記している。行末の「𐡠𐡢 who」は関係代名詞である。

11行目は、アホファリの業績を述べている。「𐡢𐡩𐡥」は 動詞と名詞がある。ここは3人称・単数・能動態・強意・完了形で、「寄進した」。「𐡩𐡤 彼のために」は「元老院に対し」の意味である。寄進したのは「𐡧𐡥𐡢𐡧」。これは、ギリシャ語の「ＡＩＷＮＩＡＮ」に対応し、「聖なる物・永遠なる物 consecrated object」のことだが、正確な単語の意味は不明。「𐡧𐡥𐡤𐡩＋𐡤」は「永遠のために」。「𐡧𐡧𐡣𐡤𐡥𐡥」は、通例、「burnt offering」とか「horocaust」と英訳され、全燔祭における焼かれた生け贄を意味する。単数・強意形。ギリシャ語の「ΘＴＣＩＡＮ」に対応する。

「𐡥𐡠𐡥𐡧」は「𐡥𐡣𐡥」の3人称・単数・完了形で、「建てた」。直接目的語は、12行目の頭の「𐡡𐡥𐡢𐡧𐡥 聖所」。複数・絶対形。同じく「ＡＮＡΘＥＭＡＴＡ」に対応する。以下、「マラクベル 𐡤𐡩𐡩𐡤𐡥」（太陽神）と「ガッド・タイミ 𐡠𐡥𐡠𐡧𐡢𐡩」（祖先神）、および「アタルガティス 𐡩𐡧𐡩𐡢𐡧𐡩」（豊穣の女神）に対する聖所であることを示す。これらは「𐡧𐡠𐡩𐡨 𐡠𐡩𐡤𐡧 善き神々の」と形容されている。

そして、「𐡧𐡠𐡥 𐡠𐡢 𐡢𐡧𐡩 彼が死んだ後」の文言は、寄進者アホファリの死後も、それを恒常的に維持する手配をしていたことを示している。「𐡠𐡢 𐡢𐡧𐡩」は接続詞で、「～以降」の意味。「𐡧𐡠𐡥」は動詞の3人称・男性・単数・完了形で「死んだ」。「𐡩𐡢𐡥𐡠𐡤」は「𐡩（彼の）＋𐡢𐡥𐡠（名誉の）＋𐡤（ために）」の構成。最後に、その建立が「西暦140年7月」と記している。

問題は、かのハイランとの関係である。「西暦140年」は、彼の時代から約1世紀が経っており、時代と人名から、次の関係（仮説2）が浮かび上がってくる。ついては、先に提示した「仮説1」とも、特に矛盾する点はない。

A.D.140

仮説2 ボーナ→ハイラン→シャバ→ハイラン→アホファリ

仮説1 ハイラン→ボーナ→ボーナ

ﾀｲﾏｲ→ｱﾃﾅﾀﾝ→ボーナ→ラブエル→ボーナ→ハイラン→息子達 A.D.137

A.D.52・56・60・74

従って、ハイランの墓建造碑文でいう「息子達」は、議長職ボーナの祖父の「𐪡𐪢𐪤𐪥ボーナ」（仮説1）と、本碑文のアホファリの祖父の「𐪡𐪥𐪦シャバ」（仮説2）である可能性が示唆される（もちろん、この二人だけとは限らない）。なお、碑文による限り、議長職ボーナが、「西暦137年」時点で健在であったに対し、元老院に貢献したアホファリは、「西暦140年」時点で既に死亡していたと考えられる。

ギリシャ・コス島におけるラブエルの祭碑（PAT1616）

これは、古く1486年に、パルミラから遠く離れたギリシャのコス島で発見された祭碑で、これを寄進した内容がパルミラ語とギリシャ語の二カ国語文で記されている。通例とは語順が逆。所蔵不明。人名などから、かのハイラン系譜の可能性が考慮される。

PAT1616のテキスト（Hillers and Cussini 1996; p.232）とTeixidorによるテキスト（Teixidor 1979; p10）では、特に2行目の文言が大きく異なっている。後者は、「𐪤𐪥 𐪨𐪠 𐪨 𐪥𐪢𐪥 May he be blessed in front of Bel」となっている。文の区切りなどからみて、同一祭碑だろうが、更に出典などの確認が必要である。前者は「MelDus 1939; p.885」に依拠し、対する後者は「Milik, 1972; p.43」に依拠している。ここでは前者に依拠しておく。いずれにしても、パルミラ人の海外進出を明示する重要な碑文である。

パルミラ語文

𐪢𐪦𐪢𐪨 𐪦𐪥 𐪤𐪡𐪥[𐪦] 1

Hairan son of Rabb'el

𐪡𐪢𐪦𐪨𐪠𐪨 𐪤𐪢𐪤 2

of Tadmor Bl to

𐪀𐪄𐪇𐪊𐪍𐪅 3

Yarhibol and

𐪀𐪅𐪄𐪀𐪋𐪊𐪅 4

Aglibol and

𐪋𐪇𐪀𐪊 𐪉𐪍𐪈𐪋 𐪍𐪊 5

the altar erected who

パルミラ語文は、「ハイランの息子ラブエルが、タドモル（パルミラ）のベール・ヤルイヒボール・アグリボール神のために祭碑を建てた」と記している。動詞の「𐪉𐪍𐪈𐪋」が複数形。従って、建造主体者はハイランを含む「複数」と示唆される。

「ベール𐪀𐪄・ヤルヒボール𐪀𐪄𐪇𐪊𐪍・ガディボール𐪀𐪅𐪄𐪀𐪋𐪊」は、パルミラの有名な三位神。「𐪀𐪍𐪄」は「𐪀𐪄」が、「𐪀𐪄𐪇𐪊𐪍」は「𐪀𐪅𐪄𐪇𐪊𐪍」が、表記としては正しい。石工によるミスか。はるか遠隔地でのパルミラ語の刻文である。

ギリシャ語文

6 PABBHΛ AIPΛ

Rabb'el of Haira-

7 NOΥ ΘEWI BH

n gods to Be-

8 ΛW<I>EΥXEN

l for blessing

ギリシャ語文は、「ハイランの息子ラブエルがベールの諸神に、祝福のために」と記している。ここでは、ベール以外の二神は省略している。なお、文字の区切り方は何となく不自然である。

本稿での関心点は、この「ハイランの息子ラブエル」が、かのハイランと関係するか否かという点である。記された父子の名前から「まま可能性」があるが、未確定である。

なお、Teixidor (1979; p10) は、碑文の文字を、特異だが「1世紀中頃」とみている。

以下のように、はるばるギリシャのコス島にまで遠征したラブエルの父ハイランが、かのハイランと同一人物と仮定（仮説３）し、今後の検討課題とする。従って、かのハイランの「息子達」の一人が、この「ラブエル」（３人目の候補）かも知れない。

（１世紀中頃？）

仮説３　ハイラン→ラブエル

仮説２　ボーナ→ハイラン→シャバ→ハイラン→アホファリ

仮説１　ハイラン→ボーナ→ボーナ　A.D.140

ﾀｲﾏｲ→ﾌﾃﾅﾀﾝ→ボーナ→ラブエル→ボーナ→ハイラン→息子達　A.D.137

A.D.52・56・60・74

PAT2759（TADMOREA 7A）

パルミラ博物館蔵（Cantineau 1933; p.183）の碑石の断片（横幅25㎝・上下18㎝）である。全体の形状も碑石の種類も不明。出土場所は未確認。４行のパルミラ語文で、碑文も断片的である。「ラブエルの息子ボーナ」云々という父子関係に加えて、「ベネ・ミタ族」であることや、年代観などから、かのハイランに関係する碑文と推定している。

パルミラ語文

・・・・・・・𐪀𐪁𐪄𐪅　𐪅𐪄　𐪁𐪃𐪅𐪄・・・・1

Rabb'el　son of　Bonna

・・・𐪁𐪆𐪇　𐪇𐪃𐪄　𐪃𐪇　𐪇𐪅　𐪇𐪃𐪅・・・・2

Mita　Bene　from　of　this

・・・𐪈𐪁　𐪁𐪄𐪅𐪁　𐪆𐪄　𐪄𐪆𐪄　𐪆・・・・3

?　the archon office of write　?

・・・・3333𐪋𐪌𐪍𐪎　𐪆𐪃𐪉・・・・4

380（A.D.68/69）?　year of

１行目の「ラブエルの息子ボーナ」の前後は欠損。従って、ボーナ自身のことを述べたも

のか、誰かの系譜の途中かは不明。後者の可能性が高い。2行目の「ベネ・ミタ族のこの～」は、しかるべき「～」部分が欠損している。

3行目は行政職・機関に関係する用語が登場している。「𐏐𐏑」は「𐏐𐏑 家・墓・神殿・場所、他」の合成形。「𐏃𐏑𐏚𐏃」はギリシャ語の「ＡＰＸＨ アルケー・権力・支配地・統率者」に対応する。合わせて「執政官職・行政長官職」といったところか。Gawlikowski (1973; p.43) は「bureau des archontes」と仏訳している。「𐏑𐏐𐏑」は動詞「書く」。「・・𐏂𐏃」は、確証できないが、「𐏁𐏂𐏂𐏃 建てた」であろうか。

4行目は、未確定だが、「380年（西暦68／69年）？」。Cantineau (1933: p.183) によるハンドコピーでは、文字の形状は古式で、編年上は「1世紀中頃」と判定できる。

問題は、「・・ラブエルの息子ボーナ・・」が、かのハイラン系譜に関係するか否の点である。私見では、その可能性を認めて、以下のように「仮説4」としておく。

A.D.68/69?

仮説4 ラブエル→ボーナ→・・・？

仮説3 ハイラン→ラブエル

仮説2 ボーナ→ハイラン→シャバ→ハイラン→アホファリ

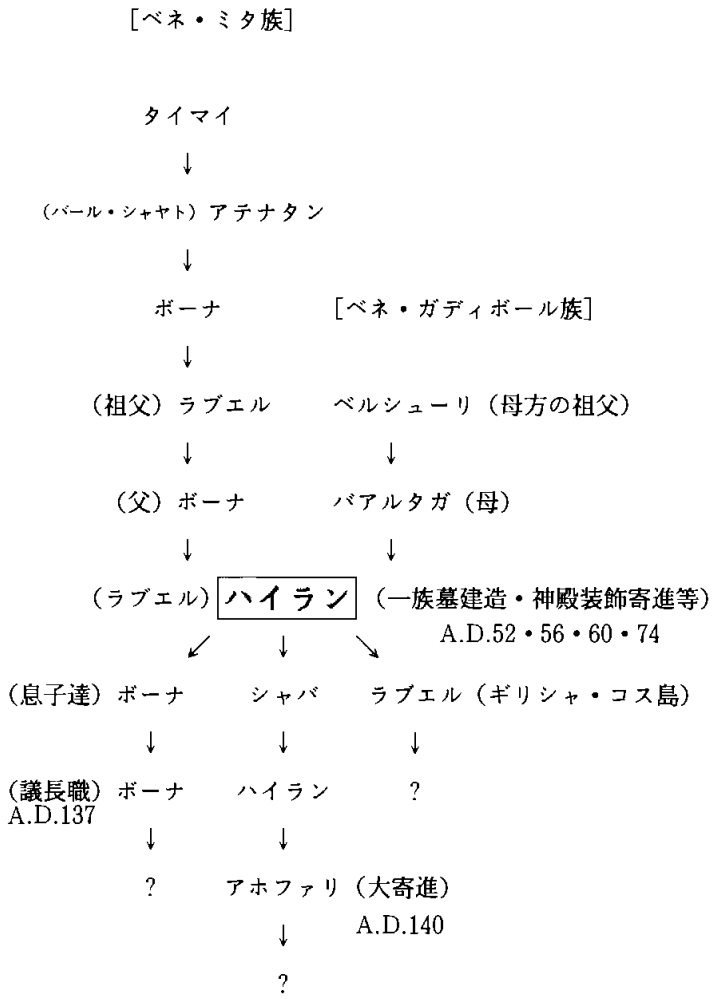
仮説1 ハイラン→ボーナ→ボーナ　A.D.140

タイマイ→アテナタン→ボーナ→ラブエル→ボーナ→ハイラン→息子達　A.D.137

A.D.52・56・60・74

結　論

以上、「パルミラの有名人・ハイラン」と題して、彼とその系譜に関する各種碑文を検討し、その周辺世界への接近を試みてきた。ハイランの三碑文と、彼とその家系に関する可能性がある四碑文を接合すると、以下のような系譜が仮説として構成できる。その妥当性の検証は、かのハイランが造営した「一族墓の発見・発掘」であることは明らかである。



謝　辞

かかるパルミラ碑文の調査に関し、シルクロード学研究センター、パルミラ遺跡発掘団長の樋口隆康先生、同副団長の小玉新次郎先生、アル・アサッド・パルミラ博物館長、泉拓良発掘隊長、西藤清秀副隊長、調査団のコーディネートをされた折田魏郎先生、そして碑文写真を格別に提供していただいた（財）島根県並河萬里写真財団に、深く感謝いたします。

参考・引用文献

As'ad, K. and Gawlikowski, M. 1997. *The Inscriptions in the Museum of Palmyra, A Catalogue*. Palmyra and Warsaw.

Bodel, J. 1992. Thirteen Latin funerary inscriptions at Harvard University. *American Journal of Archaeology* 96, 71-100.

Bodel, J. ed. 2001. *Approaching the Ancient World : Ancient History from Inscriptions*. Routledge.

Cantineau, J. 1933. Tadmorea, *Syria* 14, 169-202.

Chabot, J.-B. 1922. *Choix d'Inscriptions de Palmyre*. Paris:Impremeie Nationale.

Gawlikowski, M. 1970. *Monuments Funéraires de Palmyra*. Travaux du Centre d'archéologie méditerranéenne de l'Academie Polonaise des Sciences. Warsaw: Państwowe Wydawnictwo Naukowe.

1973; *Palmyre VI. Le Temple Palmyrénien. Étude d'épigraphie et de topographie historique*. Warsaw: Państwowe Wydawnictwo Naukowe.

Hillers, D. and Cussini E. 1996. *Palmyrene Aramaic Texts*. The Johns Hopkins University Press.

Hoftijzer, J. and Jongeling, K. 1995. *Dictionary of the North-West Semitic Inscriptions*. E.J. Brill.

Millar, F. 1993. *The Roman Near East: 31 B.C.-A.D.337*. Harvard.

Keppie, L. 2001. *Understanding Roman Inscriptions*. Routledge.

Parca, M. 2001. Local Languages and Native Cultures. Bodel, J. ed. 2001; 57-72.

Rodinson, M. 1950. Une inscription trilingue de Palmyre, *Syria* 27, 137-142.

Rosenthal, F. 1936. *Die Sprache der Palmyrenischen Inschriften und ihre Stellung Innerhalb Aramäischen*. Mitteilungen der Vorderasiatisch-Aegyptischen. Leipzig: J.C. Hinrichs'sche Buchhandlung.

Schlumberger, D. 1971. Les quatre tribus de Palmyre, *Syria* 48, 121-133.

Stark, J. 1971. *Personal Names in Palmyrene Inscriptions*. Clarendon Press.

Teixidor, J. 1979. *The Pantyheon of Palmyra*. Leiden: Brill.

小玉新次郎 1994 『隊商都市パルミラの研究』同朋社